



風の中に

思い出す。

秋吉君

私が小学生だった頃のことですので、もう十年以上も昔の話です。

秋が深まるとともに空気が乾燥し、その年、子ども達の間でインフルエンザが大流行しました。ひどい咳と高熱が何日も続き、そのまま亡くなってしまう子が後を絶ちませんでした。

確か、九月の終わりだったように思います。クラスの半数近くの子が学校を休んだため、授業はお昼前に終わってしまいました。

私は友達と遊ぶ約束をした後、一旦家へ帰りました。家では祖母と母が待ちかまえていて、どれほどの効き目があるのか分かりませんでした。祖母は箒で私の服をはたき、母は洗面器に水を入れて持ってきて、早く手を洗ってうがいをしなさいと険しい顔を見せました。

ランドセルを置きに階段を上がろうとすると、母が、  
「学校が早引きになったからって、外で遊んだらいかんよ。本でも読んで大人しくしとりなさい」

と釘を刺しました。苛立った表情でした。二年前の冬に弟が病死してからというもの、母は神経質でした。

私は生返事をして部屋へ引き込みましたが、すぐにこっそりと窓から抜け出しました。

外へ出ると、風が低い音をたてて地面を舐めるように吹いていました。厳しい冬の予感が町の端々に感じられ、道がひどく広く感じました。どうしてだろう、と不思議な気持ちでしたが、暫くして気がつきました。子どもが一人も居ないのです。神経質なのは、私の母ばかりではなかったようです。

約束をした友達は来ませんでした。せっかく家を抜け出したのに、このまま帰るのもつまらないと思った私は、通りを進み細い道を歩いて行きました。突き当たりに、大きな二階建てのお屋敷があることを知っていました。そして、そこの庭に柿の木が生えていて、大きな実がなっているはずでした。

細道の向こうに古いしっかりした造りの門があり、横手へ回ると大きな柿の木が見えました。塀からはみ出した枝々には、思ったとおり大きな橙色の実が、傾きかけた弱い陽の光を浴びていました。

私は早速塀をよじ登って木に飛び移り、柿の実を一つもいで囓りました。実はまだ固くやや酸っぱかったはずですが、家を抜け出し一人で町を歩いてきたという興奮が手伝ってか、たっぷりとした果肉はこの上なく美味しいものに感じました。

なにか音がした訳ではありません。ふと屋敷の二階の窓へ目をやると、私よりも二つか三つ年上の、恐らく中学生くらいの少女の姿が見えました。少女は窓際で本を読んでいるのでした。

見つかったは大変だと思い、慌てて塀へ飛び移ろうとしましたが、勢いよく踏ん張ったため枝が鈍い音を立てて半分折れてしまい、危うく地面に落ちるところでした。辛うじて掴んだ枝にぶらさがりながら窓に目をやると、少女が驚いた表情で私を見ていました。

宙に浮いた足で別の枝を探って足場を確保すると、私は改めて窓の方に目をやりました。部屋の中が薄暗かったせいか、少女の上着が白く光っているようでした。しかしそれ以上に私の目を眩しくしたのは頬です。少女というのはあんなにも透き通った肌を持っているものなのだろうか……涼しい細い風が横切ったとき、私は、一刻も早くその場から逃げ出さねばならないと思いました。

その時、少女がずっと右手をあげる動作が視界に入りました。見ると、少女は人差し指でガラスを二度軽く叩き、小さな口を動かしながらこちらを指さします。私はその意図を察しました。

とりわけ綺麗な色の柿の実を選んで枝から取りました。そして掌にのせて少女の方へ見せると、少女は一度部屋の奥を振り返り、人差し指を立てて赤い唇に当てながら、音がしないようゆっくりと窓を開けました。私は窓の中へそっと柿を放りました。実は緩やかな曲線を描いて少女の掌に納まり、少女は手の中に明かりでも見るような優しい視線を落としました。それから顔をあげると私に微笑んでくれました。

翌日から私に習慣が出来ました。学校が終わって家へ帰ると洗面器に手を入れ、うがいをし、夕飯まで本を読むから邪魔をしないでと母に告げて部屋に入る。そして窓からこっそり抜け出して通りに出ると、ひと気のない道を走って柿の木がある屋敷へ行く。少女は窓際で読書しながら、私が来るのを待っていてくれました。

塀に登って木に飛び移ると、それまで閉じられていた窓がずっと横に開いて、白い顔が微笑んでくれました。そして私は、とりわけ大きく綺麗な柿の実を一つだけ選んで、少女に放つてやるのでした。

少女の肌は透きとおっていました。しかしある日私は、肌の底にうっすらと青い影を見ました。

少女の頬はほっそりしていました。しかし曲線は日に日に頼りないものになっていきました。少女は時折軽く咳をしました。しかし会うたびに咳の回数が増えていき、苦しそうな表情を私の前でも見せるようになりました。

一週間後、窓に現れた少女の頬は赤く上気して、顔中に汗を掻いていました。私が柿の実を差し出しても、ただ弱々しく首を横に振るだけで、窓を開けてくれませんでした。

そして翌日は、窓に姿を現してくれませんでした。私が木を揺すって音を立てても、窓は決して開くことはありませんでした。

その年、学校で何人も生徒が亡くなりました。祖母の箒と母の洗面器が効いたのか、幸い私はくしゃみ一つすることはありませんでしたが、代わりに空虚で陰鬱な感情が私の胸を苦しめて、瞼に残った白い肌はますます白さを増すのでした。

その後何年もの間、季節が変わって再び秋が巡ってくるたび、薄暗い部屋で読書をしている少女の姿を思い出しては胸が締められる感触を抱いたものでしたが、あの屋敷へは近づかないよう努めたためでしょうか、年月と共に次第に記憶は薄れ、思い出す回数も減っていきました。

十年近く経ちました。私は故郷を離れて、大学の寮で生活していました。

ある年の秋、祖母が亡くなったという知らせが届き、久しぶりに帰省したときのことです。

お葬式が済んで、明日故郷を発つという日の夕方、ふと私は、あの柿の木の屋敷はどうしただろうと思いました。なぜ突然思い出したのか分かりません。もう何年も記憶の深奥へ仕舞い込まれていた光景と感情が突如湧いてきて、私は無意識のうちに一人家を出ました。

数年前から近所も次第に拓けてきて、通りには車が頻繁に往来するようになっていましたが、大通りを少し外れて細い路地に入ると、昔と殆ど変わらない景色と静けさが残っていました。

ズボンのポケットに手を入れながら細道を進みました。涼しい空気に混じって土や乾いた木の葉、キンモクセイの匂いが微かに漂って来ました。やがて前方に、木造のお屋敷がぼうっと姿を現して、横手には柿の木が、記憶よりも幾らか小さく立っていて、しかし枝には昔と何も変わらない、眩しい位の橙色の実がたくさんなっているのです。

胸が躍りました。少年の時の感情があふれ出すと共に読書をする少女の姿が私の目の前を鮮やかに過ぎていきました。私は柿の木の前に立ち止まり、暫く木を見上げていました。橙色の実を一つ取ってみようと手を伸ばしましたが、届きそうにありません。周りを見回して人の気配がないことを確認し、私は塀によじ登りました。

塀の上に中腰で立ったまま、目の前の柿の実に手を伸ばした時です。二階の窓がずっと開いたような気がしました。驚いて目をやると、確かに窓が開いています。私は思わず身を乗り出して部屋の中を覗きました。机の上に本が見えました。少女が読んでいた本だ、きっとあの時の少女はまだ部屋に居るんだ……興奮を抑えきれず更に身を乗り出した瞬間、バランスを失い、私は塀の上から落ちてしまいました。

衝撃は感じましたが、幸い怪我はないようでした。

安堵して起き上がろうとすると、すぐ隣に老婆が立っていて、真上から驚いた顔で私を見下ろしていました。

「大丈夫かねあんた、こんな所に寝転がって」

私は恥ずかしくなり、言い訳のつもりで、柿の実を取ろうとして足を滑らせてしまった、と説明しました。

「柿の実？」老婆は一層驚いた顔をしてみせましたが、すぐに笑いながら言いました。「面白いことを言いなさる。そうねえ、ここに柿の木がありましたねえ。でももう五年も前に切り倒されましたよ」

私は体を起こして辺りを見ました。老婆の言うとおりに、柿の木などありません。それどころか、屋敷自体なくなっていて、広大な空き地には横風がくるくると舞っているばかりです。



風の中に思い出す。

<http://p.booklog.jp/book/36481>

著者：秋吉君

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/akiyossy/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/36481>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/36481>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのpapier（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社paperboy&co.